

# 近代日本における文芸エリートの社会学的考察

山内 乾史

## 1. はじめに

本稿の目的は近代日本における文芸エリートの供給源、つまり出身地、出身階層と学歴を考察し、近代日本の文芸の性格の一端を明らかにすることである。周知のように、通常、文芸とは「言語によって表現された芸術」を指示する用語である。しかし、本稿で言う文芸エリートとは、一般、大衆誌紙において高水準の文芸活動を行った者を指し、特定団体のプロパガンダ誌紙、学界誌のみに執筆していた者は含まない。したがって、芸術家、教育者、学者などは、一般、大衆誌紙において高水準の文芸活動を行った者に限り考察の対象になる。

近代日本の文化形成において、出版文化の果たした役割については多言を要しないであろう。明治後期以降、就学率の上昇にともなう識字率の上昇によって、出版文化はよりその影響力を増した。大正期から昭和初期にかけて、雑誌の創刊ブームや円本ブームが起こったのはその証左である。出版文化の隆盛によって、文芸エリートの活躍の場は拡大し、その結果、大衆文化、世論に対する彼らの影響力は増したと考えられる。

文芸エリートは芸術界、教育界、学界などの指導者とともに、文化エリートの一翼を成すと考えられる。ミルズは、現代においては、政治エリート、産業エリート、軍事エリートに集約的にコマンド・ポストが配分され、他の諸制度はこれに従属すると述べた<sup>(1)</sup>。なるほど、文芸エリートは、エリートや、カウンター・エリート<sup>(2)</sup>の周辺部に位置し、支持的な役割を演じるにすぎないという見方もある。しかし、文芸エ

リートはマス・メディアを通じて文化を作り出し、文化を広範に伝え、大衆文化、世論の形成上大きな役割を演じた。ケラーの言葉を借りれば、文化エリートは制度化された価値体系を社会成員に内面化させる機能を担うのである<sup>(3)</sup>。この意味で彼らの担った役割は社会的に重要である。

ところで、文芸エリートが何を伝達したのかを考える上で、彼らがいかなる文化を背景に、いかなる教育を受けて登場したのかという問題は極めて重要である。しかし、この点に関しては著名な文学者を除いては、十分に明らかにされておらず、特に文芸エリート集団の数量的特性を明らかにした研究は少ない。本稿では文芸エリートの、出身地、出身階層、学歴の三点について考察を加え、彼らの供給源の特性を各界エリートの供給源と比較しつつ、明らかにしていきたい。この点を明らかにすることは、彼らがいかなる文化を代表し、伝達していたかということ、ひいては近代日本の文芸がいかなる性格を持っていたのかを考察する上で重要な意味を持つと思われるのである。

## 2. 先行研究の知見

さて、文芸エリートの供給源について、先行研究で得られている知見をまとめておこう。

中世、近世の文芸は、宮廷文芸、町人文芸等、封建制度下の身分階級を基盤として成立していた。ただし、町人階級が台頭するのは近世に入ってからであり、中世文芸は貴族、武士階級に独占されていた。佐々木克衛は、近世に及んで町人文芸が台頭する理由を次のようにまとめている<sup>(4)</sup>。つまり、①徳川幕府の文治政策による保護、②寺子屋等の普及による文盲率の低下と知識欲の増大、③印刷術の発展と出版企業の出現、④太平の世の中での町人階級の富の蓄積、である。ただし「武士は武士としての学問、芸術、文学等を生み、町人は町人としての文化、文学を持った」<sup>(5)</sup>のであり、この二つの身分階級の文芸は、その書き手も読み手も自階級内に求め、両者の接点はほとんどなかったのである。また、農民階級は独自の文芸を持たなかった。

これに対して、明治後期以降は、近代学校教育制度の普及によって一層読み手の識字率が上昇し、知識欲も向上したであろう。しかし、近代日本の文芸にとって、近代学校教育制度の発展がもたらしたものはこの点に尽きるのであろうか。書き手の供給源にもインパクトを与えたのではないだろうか。

この点について示唆を与えるのは、中道実<sup>(6)</sup>、麻生誠<sup>(7)</sup>、萬成博<sup>(8)</sup>の研究である。中道は「文学・芸術家」について、萬成は「文化界」について、麻生は「芸術家」に

## 近代日本における文芸エリートの社会学的考察

ついて、それぞれ検討している。ただし、萬成のサンプルは学者を含むのに対し、中道と麻生のサンプルは学者を含まない。これらの研究の問題点は、①これらのカテゴリーが具体的にいかなる人物をどの程度含むのかが明確に定義されていないことと、②結論を下すには、サンプル数が少なすぎることで、挙げられる<sup>(9)</sup>。しかし、これらの研究によって指摘された、文学者あるいは芸術家の特性は流布しているイメージと合致すると思われる。そこで、この三者の研究の内、本稿と共通する問題意識から各界指導者の供給源を比較、分析した中道の研究を概観しよう。

中道は1969年時点の各領域の指導者を『人事興信録』より抽出し記載事項を分析するとともに、抽出された指導者を対象に質問紙調査を行った。その結果、「文学・芸術家」は各領域の指導者に比して、初職年齢が最も低く、これは「学歴よりはむしろ独自の才能を重視される」ためであると指摘した<sup>(10)</sup>。つまり、文芸エリートは特定の文化・教育を背景に登場するのではなく、レッセ・フェールの過程から個々人の才能によって登場すると言うのである。さらに中道は「文学・芸術家」の出身階層を吟味した結果、上層階層（専門職、管理職、及び地主）出身者の比率は28.6%で、世襲率は0%であると指摘した<sup>(11)</sup>。この出身階層構成は、産業界、政界、官界、学界の指導者と比べると著しく低く、その結果は「文学・芸術家」は各階層に最も開かれた領域であるという印象を与える。この仮説は文芸エリートの供給源について流布している仮説であると言えよう。

しかし、上述したように中世、近世の文芸エリートは、封建制度下の身分階級を母胎にして供給されたのであるから、中道の指摘した出身階層の制約の弱化がいつごろから生じたのか、あるいは本当に生じたのかは、興味深いところである。また、本当に学校教育は文芸エリートの形成に寄与しなかったのであろうか。近代日本においては、個人の職業が生得的属性に直接的に影響されるよりも、学歴という生得的属性を内包した業績<sup>(12)</sup>によって影響されるところが大きいことは周知の通りである<sup>(13)</sup>。たしかに、文芸的素養、ことに感性は学校教育で養われるものではなく、強いて言えば識字能力が必要であるが、これは初等教育で十分であろう。しかし、近代学校教育制度の発足、発展によって、既存の文芸エリートの供給源になんらかの変質がもたらされ、さらに、そのことが特定地域、特定社会階層から文芸エリートが登場しやすくなるような土壌を形成しているとは考えられないのであろうか。この点を具体的なデータに基づき検討していこう。

### 3. 文芸エリート抽出の手続きについて

冒頭に述べた通り、本稿は一般、大衆誌紙に高水準の文芸活動を行った文芸エリートの特徴を数量的に明らかにすることを目的とする。特に本稿では文芸エリートの中でも著名な、トップ・エリートに限定して分析を行う。したがって、特定団体のプロパガンダ誌紙、学界誌のみに執筆していた人物を除きつつ、高水準の文芸活動を行った人物を各領域にわたって網羅した人名事典と、トップ・エリートとしての業績の質を示す指標が必要である。

人名事典としては日本近代文学館編『日本近代文学大事典 机上版』（講談社、1984）を用いた。この事典には、文学者を中心として各領域の著名なトップ・エリート、やや実績、知名度の劣るミドル・エリート、さらには一般にはほとんど知られていないローワー・エリートまでもが収録され、総勢5700名弱にも達している。記載人名数、記載内容の精度、正確さについて、管見に入った限りでは同種の名人事典の水準をはるかに上回る。

また、トップ・エリートとしての業績の質を示す指標は、全集（あるいは全仕事）が刊行されたか否かに求めた。全集が刊行されるということは、創作、評論が一定の水準に達しており、社会的、文学的影響力があつたことの証左であると考えられる。もちろん、寡作な文学者、早世した文学者は全集が出されやすく、生産的な文学者は全集が出されにくいという問題はあるし、出版業界への影響力の有無なども関係するであろう。このためサンプルには一部トップ・エリートの遺漏と、一部ミドル・エリートの混入という問題が生じる。また、全集とは名ばかりで編集者の意図によって取舍選択がなされていることもあるし、生前に出た全集などはもとより真の意味での全集ではない。しかし、文学者としての社会的、文学的影響力を示す客観的指標としては、様々な問題点はあるものの、妥当な指標であると思われるし、この他には妥当な指標は見いだし得ない。

抽出された文芸エリートは総勢458名（内女性30名）であり、事典の収録人名数の8%強に相当する。次節では、この458名全数を対象に分析を行うこととする。

### 4. 文芸エリートの供給源の分析

分析を始める前に、時期区分について述べておこう。本稿では文芸エリートを5つのコーホートに分割する。第I期は1859年以前に出生したコーホートで、近代学校教育制度の洗礼を受けずに文芸界に登場した者が多い。また明治初期から活躍した者

## 近代日本における文芸エリートの社会学的考察

が多く、1840年以降の出生者が60%を占める。最も早く出生したのは大田垣蓮月（1791～1875）であり、他に福沢諭吉などが含まれる。第Ⅱ期は1860年から1879年までに出生し、近代学校教育制度を通過して、明治中期以降に活躍するコーホートである。近代日本の文芸界の巨頭と言われた、森鷗外、夏目漱石、二葉亭四迷などが含まれる。第Ⅲ期は1880年から1894年までに出生し、明治後期以降に活躍するコーホートである。大山郁夫などの社会運動家、芥川竜之介などの漱石の弟子達、志賀直哉などの白樺派や、谷崎潤一郎などが含まれる。第Ⅳ期は1895年から1904年までに出生し、大正期以降に活躍するコーホートである。小林多喜二などのプロレタリア文学者、川端康成などの新感覚派や、小林秀雄などが含まれる。第Ⅴ期は、1905年以降に出生し、昭和期に活躍するコーホートである。ここには昭和生まれの者が13名含まれ、うち6名は新制学校教育制度の卒業生である。最も遅く出生したのは岸上大作（1939～1960）であり、他には太宰治などの無頼派、島尾敏雄などの「第三の新人」、三島由起夫などが含まれる。

各時期の人数はそれぞれ、30人、92人、126人、110人、100人で、その内女性はそれぞれ、1人、5人、7人、12人、5人である。

## ① 活動領域

さて、まず時期別、活動領域別の文芸エリートの数を検討しよう。表1を参照され

表1 文芸エリートの活動領域別分布 (%)

	小説家 劇作家	詩人	歌人	俳人	評論家	哲学・思想 宗教・政治	その他	合計(N)
第Ⅰ期	6.7	3.3	23.3	3.3	3.3	46.7	13.3	100(30)
第Ⅱ期	27.2	8.7	15.2	3.3	14.1	17.4	14.1	100(92)
第Ⅲ期	40.5	17.5	8.7	4.8	7.9	10.3	10.3	100(126)
第Ⅳ期	51.8	19.1	3.6	5.5	5.5	5.5	9.1	100(110)
第Ⅴ期	59.0	18.0	2.0	6.0	12.0	1.0	2.0	100(100)
全 体	42.4	15.3	8.3	4.8	9.2	10.9	9.2	100(458)
内女性	60.0	0.0	16.7	10.0	10.0	3.3	0.0	100(30)

たい<sup>(14)</sup>。時期を下るにつれ、小説家、詩人が増加するのがわかる。逆に歌人、哲学者、思想家などが減少している。また、女性は小説家と歌人、俳人に多く、詩人、哲学者、思想家に少ないようである。貴族、武士階級の文芸としての性格を強く持ち合わせている短歌が文芸界において比重を減じていくのがわかる。

## ② 出身地

次に、出身地を検討しよう。ここで言う出身地とは本人の出生地のことである。表2を参照されたい。東京出身者が各時期とも20%前後を占め、関東、大阪、近畿の各

表2 文芸エリートの出身地別分布(%)

	北海道	東北	東京	関東	甲信越	北陸	東海	大阪	近畿	中国	四国	九州	海外
第Ⅰ期	0.0	6.7	30.0	10.0	3.3	3.3	6.7	3.3	6.7	3.3	10.0	13.3	3.0
第Ⅱ期	0.0	8.7	19.6	13.0	7.6	7.6	7.6	4.3	6.5	13.0	8.7	3.3	0.0
第Ⅲ期	1.6	7.1	26.2	14.3	5.6	3.2	7.1	1.6	7.9	10.3	3.2	11.9	0.0
第Ⅳ期	5.5	8.2	17.3	10.9	8.2	1.8	6.4	5.5	7.3	10.0	7.3	10.9	0.9
第Ⅴ期	6.0	3.0	25.0	5.0	7.0	6.0	4.0	9.0	10.0	6.0	3.0	13.0	3.0
全体	3.1	6.8	22.7	11.1	6.6	4.4	6.3	4.8	7.9	9.6	5.7	10.0	1.1
内女性	0.0	3.3	33.3	6.7	6.7	3.3	3.3	3.3	6.7	13.3	3.3	16.7	0.0

注)「合計(N)」は表1に同じ

出身者と合わせると40%~50%を占めている。つまり、文芸エリートは大都市及び、その近郊から約半数が供給されており、その傾向には時期的変化はないということである。

江戸時代以降、文化の中心は江戸と上方に二分されていた。しかし、明治維新の前後にはすでに大阪、近畿出身者の比重は軽く、東京、関東出身者を中心にして文芸界が形成されていたのではないかとと思われる。

次に、東京出身者の比率を各界エリートと比較してみよう。秦郁彦の重要官僚の研究<sup>(15)</sup>では、1871年までの出生者については4%、1872年から1906年までの出生者については13%である。萬成の産業界エリート研究では、大正期も1960年もともに13%である<sup>(16)</sup>。高根正昭の政界エリート研究では1860年8%、1890年6%、1920年14%、1936年28%、1969年13%である<sup>(17)</sup>。麻生の各界エリート研究でも1911年から1964年まで13%と20%の間を上下動している<sup>(18)</sup>。以上、文芸エリートについては、各界エリートよりも東京出身者の占める比率が大きい。しかし、各界エリートに占める東京出身者の比率が漸増し、供給源が同質化する傾向も見られる。

### ③ 出身階層

次に、表3には文芸エリートの出身階層を記した。ここで言う出身階層とは、出生時の父親の職業を指している。諸説ある者、不明者などが多く、判明率は各時期とも70%台と信頼性をやや欠く。しかし、マクロな傾向を把握するには大きな支障はないであろう。

第Ⅰ期と第Ⅱ期は資料の制約から族籍を用いた。第Ⅰ期、第Ⅱ期ともに武士階級出

## 近代日本における文芸エリートの社会学的考察

表3 文芸エリートの出身階層別分布 (%)

	武士階級		町人階級			農民階級		合計(N)
	専門	管理	事務	販売	労働者	地主	農漁民	
第I期	81.8		18.2			0.0		100(22)
第II期	63.9		25.0			11.1		100(72)
第III期	33.7	22.1	12.6	16.8	2.1	5.3	7.4	100(95)
第IV期	22.6	11.9	16.7	15.5	13.1	6.0	14.3	100(84)
第V期	41.4	18.6	10.0	17.1	5.7	2.9	4.3	100(70)

身者の比重が極めて大きい一方で、町人、農民階級出身者も増加していることがわかる。また、第III期から第V期までは、職業階層を用いて区分した。専門職階層出身者が各時期とも多いのが目立つ。専門職階層が近代日本においては、全人口の1%前後であった点を加味すれば、この階層は文芸エリートを特に輩出しやすかったと言えよう。管理職階層も全人口に占める比率は2%を越えなかったにもかかわらず、文芸エリートの12%から22%がこの階層の出身者である。事務職、販売職、地主階層も専門職、管理職階層ほどではないにしても文芸エリートを輩出しやすい階層と言える。文芸エリートを輩出しにくい階層は、労働者階層と農漁民階層、特に後者である。農漁業従事者は明治初期には80%、昭和初期でも過半数に達していたにもかかわらず、各時期に輩出された文芸エリートはそれぞれ7%、14%、4%と僅少である。つまり、第I期と第II期は武士階級出身者が多く、第III期以降は専門職、管理職階層出身者が多い一方で、労働者、農漁民階層出身者が少ないという構成になっているのである。

ところで、第IV期にはその前後の階層構成とは異なる傾向が見られる。つまり、専門職、管理職階層出身者の比率が低下し、労働者、農漁民階層出身者の比率が上昇している。この原因は、プロレタリア文化・芸術運動のインパクトに求められよう。ナップ(NAPF、全日本無産者芸術連盟)、コップ(KOPF、日本プロレタリア文化連盟)の指導による、この運動は「階級闘争のための文化・芸術」を標榜し、労働者、農漁民階層出身者、あるいは女性などの、従来の文芸界では重きを占めなかった階層、集団から才能を発掘したのである。しかし、このインパクトは部分的で、専門職、管理職階層出身者が圧倒的優位を占める既成文芸界の基本的構造を変革するには至らなかったし、また一時的なものでもあった。

次に、各界エリートの出身階層構成と比較してみよう。萬成によると明治期には政界、文化界エリートには士族が多く、産業界エリートには平民が多かった。しかし、

大正期には政界、文化界では士族が減少し、各界エリートの構成は徐々に同質化していく。また、職業階層を見ると、管理職階層出身者が増加している一方、自小作農、労働者階層出身者はほとんど各界エリートを輩出していない<sup>(19)</sup>。秦によれば、1871年以降出生の重要官僚は24%が農林業階層出身者、3%が職人・職工階層出身者である<sup>(20)</sup>。文芸エリートは各界エリートよりも①士族が多く、②専門職階層出身者の比率が大きく、農漁民階層出身者の比率が小さい、という特徴を持つのである。

先述のように、中道は出身階層については上層階層出身者が28.6%と指摘した。本稿で同様の比率を算出すると、第Ⅲ期から第Ⅴ期までそれぞれ61%、40%、63%となり、かなり上層に偏していることがわかった。ただし、世襲はほとんど見られず、この点については中道の指摘は支持される。

#### ④ 最終学歴

さて、次に表4をもとに文芸エリートの最終学歴を検討しよう。ここで言う最終学歴とは、卒業した者だけでなく、中退した者も含む。また、表に第Ⅱ期以降しか掲げていないのは、第Ⅰ期には近代学校教育制度を通過した者が少ないためである。ちなみに、第Ⅰ期には大学南校出身者が2名、慶応義塾出身者が3名、官庁の教育機関出身者が2名、他の学校出身者が3名いる。また、女性は実数が少ないので、期別には算出できなかった。

表4 文芸エリートの学歴別分布 (%)

〈男性〉										
	東京 帝大	京都 帝大	早大 系統	慶大 系統	他の 帝大	高等教育		中等 教育	初等 教育	合計(N)
						東京	他			
第Ⅱ期	30.9	0.0	13.6	2.5	0.0	16.0	12.3	18.5	6.2	100( 81)
第Ⅲ期	30.5	4.2	22.9	9.3	0.0	10.2	2.5	13.6	6.8	100(118)
第Ⅳ期	24.2	8.4	14.7	5.3	1.1	13.7	4.2	17.9	10.4	100( 95)
第Ⅴ期	24.7	8.6	7.5	8.6	4.3	17.2	10.8	12.9	5.4	100( 93)
全 体	27.6	5.4	15.2	6.7	1.3	14.0	7.0	15.5	7.2	100(387)
〈女性〉										
	日本女子大学校		東京女子高等師範		中等教育		初等教育		合計(N)	
全 体	13.8		3.4		69.0		13.8		100( 29)	

「早大系統」とは早稲田大学本科、予科、高等学院、及び前身の東京専門学校出身者を指し、「慶大系統」とは慶応義塾大学本科、予科、及び前身の慶応義塾出身者を指す。また、本稿でいう出身者には中退者が含まれている。

## 近代日本における文芸エリートの社会学的考察

表4によると、第Ⅱ期から第Ⅴ期まで基本的には学歴構成に大きな変化はないと言えるだろう。東京帝大出身者は第Ⅱ期、第Ⅲ期には31%を占め、第Ⅳ期、第Ⅴ期にはやや比率は低下するものの24%を占め、各時期とも最大のグループである。京都帝大出身者は、第Ⅲ期から第Ⅴ期まで徐々に比重を増している。早大系統出身者は第Ⅴ期を除いて13%以上と東京帝大に次ぐ勢力を持っていた。慶大系統出身者は終始10%未満であった。また、東京帝大、京都帝大以外の五帝大出身の文芸エリートは5名と僅少である。これら七帝大と早慶大以外の高等教育機関は、所在地によって二分した。

「他」の中には海外の高等教育機関も含まれている。東京の高等教育出身者の比率は、各時期とも他の地域にあたる高等教育出身者の比率を上回っていることがわかる。東京帝大、早慶大系統をあわせると、第Ⅱ期から第Ⅴ期まで東京の高等教育出身者が、それぞれ63%、73%、58%、58%を占める<sup>(21)</sup>。このことから、東京の高等教育機関へ進学することが文芸エリートにとっていかに重要であるかがわかるであろう。東京帝大以外の六帝大はその高い威信にもかかわらず、京都帝大以外は文芸エリートをほとんど輩出しなかったし<sup>(22)</sup>、同志社のように伝統ある高等教育機関からもあまり登場しなかったことは、そのことを傍証している。

なお、中等教育出身者は15%前後、初等教育出身者は、第Ⅳ期を除いて6%前後に留まっている。つまり、男性の場合、高等教育出身者が各時期とも72%を越えているのである。文芸エリートの教育水準が当時の一般男性の教育水準と乖離していることは説明を要しないであろう。一方、女性の場合は中等教育出身者が70%、高等教育出身者が17%とこれも当時の一般女性の教育水準を大きく上回る。

次に各界エリートの学歴構成と比較してみよう。萬成によれば産業界、政界、学界の高等教育学歴所持率は、明治期にはそれぞれ17%、28%、59%であった。ところが大正期にはそれぞれ63%、83%、86%、1960年にはそれぞれ91%、87%、91%となる<sup>(23)</sup>。つまり、明治期は産業界、政界の高学歴化が遅れていたが、各界エリートの高等教育学歴所持率が上昇し、同質化していくのである。また、麻生は、1941年になってようやく高等教育学歴所持者が過半数に達するのであり、明治、大正期には30%にも達していないと指摘している<sup>(24)</sup>。文芸エリート集団は明治期には国民一般ばかりでなく、産業界、政界エリートとも乖離した高学歴社会であったのである。特に、東京の高等教育出身者が多く、このことは青年期をどのような地域、教育機関で過ごすかが、文芸エリートの形成にとって重い意味を持つことを示している。しかし、時代を下るにつれ各界エリートの供給源が同質化する傾向もまた観察されるのである。

## ⑤ 東京、京都両帝大出身者の出身高校

東京の高等教育出身者のうち私大出身者は予科から進学するので、概ね10代後半には東京に集結していることになる。では、東京、京都両帝大出身者の場合、いかなる地域のいかなる高校の出身者が多かったのであろうか。一般に、文学者が文芸活動を開始する時期が、10代後半から20代前半と比較的早期であることを考えると、文芸エリートがいかなる高校に進学するかということは重要な問題である。

表5 東京、京都両帝大出身文芸エリートの出身高校別分布(%)

	一高	三高	他のNS	他旧制高校		その他	合計(N)
				I	II		
〈東京帝大〉							
第Ⅱ期	52.0	4.0	24.0	0.0	4.0	16.0	100( 25)
第Ⅲ期	61.1	11.1	11.1	13.9	0.0	2.8	100( 36)
第Ⅳ期	39.1	39.1	17.4	0.0	4.3	0.0	100( 23)
第Ⅴ期	26.1	0.0	8.7	30.4	30.4	4.3	100( 23)
全 体	46.7	13.1	15.0	11.2	8.4	5.6	100(107)
〈京都帝大〉							
第Ⅲ期	60.0	0.0	20.0	0.0	0.0	20.0	100( 5)
第Ⅳ期	25.0	37.5	0.0	0.0	25.0	12.5	100( 8)
第Ⅴ期	0.0	42.9	14.3	14.3	28.6	0.0	100( 7)
全 体	25.0	30.0	10.0	5.0	20.0	10.0	100( 20)

「他のNS」とは一高、三高以外のナンバー・スクールを指す。「他旧制高校Ⅰ」とは浦和高校、東京高校、大阪高校、成城高校及び学習院高等科を指し、「他旧制高校Ⅱ」とはその他の旧制高校を指す。「その他」とは高等専門学校などからの進学者を指す。

表5によると、東京帝大出身者の場合、第Ⅱ期、第Ⅲ期は一高出身者が過半数を占め、第Ⅳ期には三高出身者が台頭し、第Ⅴ期にはナンバー・スクール以外の旧制高校出身者が増加している<sup>(26)</sup>。しかし、東京、関東、大阪、近畿所在の浦和高校、東京高校、大阪高校、成城高校、学習院高等科の出身者が、その半分を占めている<sup>(26)</sup>。つまり、多い時期には86%、少ない時期でも56%は東京、関東、大阪、近畿の高校の出身者で占められているのである。京都帝大出身者の場合は一高出身者が少なく、三高出身者が多くなるものの、おおまかな傾向は東京帝大出身者に同じである<sup>(27)</sup>。つまり、東京、京都両帝大出身の文芸エリートの多くは、高校進学時にすでに大都市圏の高校、それも一高、三高に代表されるセレクトィヴな少数の高校へ進学し、その文化を吸収する一方で、文芸活動を開始すると考えられるのである。

## 近代日本における文芸エリートの社会学的考察

## ⑥ 卒業率

表4には中退者も含めて最終学歴の分布を検討したので、卒業率を吟味しておく必要がある。文芸エリートはアウト・サイダーというイメージが強く、文芸活動や社会運動に没頭して学業を怠るとか、あるいは授業料が払えないとかの理由で、退学、除籍、放校などの処分を受けた者が多いように受け取られている。果たしてこのイメージは現実を反映しているのであろうか。表6を参照されたい。

表6 文芸エリートの学歴別の卒業率 (%)

〈男性〉									
	東京 帝大	京都 帝大	早大 系統	慶大 系統	他の 帝大	高等教育		中等 教育	初等 教育
						東京	他		
第Ⅱ期	91.7	—	60.0	0.0	—	50.0	60.0	53.3	100
第Ⅲ期	86.1	80.0	69.2	54.5	—	83.3	0.0	23.1	20.0
第Ⅳ期	77.3	100	46.2	25.0	0.0	83.3	75.0	64.7	88.9
第Ⅴ期	81.8	87.5	71.4	100	100	93.3	55.5	72.7	80.0
全 体	84.6	90.0	62.5	58.3	80.0	78.4	53.8	53.6	72.7
〈女性〉									
	日本女子大学校		東京女子高等師範		中等教育		初等教育		
全 体	33.3		100		89.5		25.0		

東京帝大出身者は85%、京都帝大出身者は90%が卒業している。それに対して早大系統、慶大系統の出身者はそれぞれ63%、58%しか卒業していない。他の高等教育出身者については、東京の高等教育出身者は78%が卒業したのに対し、他の地域の高等教育出身者は54%しか卒業していない。また、中等教育出身者も54%しか卒業していない。男性の場合は初等教育を除くと、帝大→早慶大→他の高等教育機関→中等教育機関と、教育機関としての威信が高いほど卒業率が高くなるという傾向を示している。つまり、従来のアウト・サイダーというイメージは教育水準が下がるほど妥当るのであり、帝大出身者には妥当しないのである。また、女性については中等教育出身者の卒業率が90%と高くなっている。

## ⑦ 高等教育機関での専攻

文芸エリートの専攻を東京、京都両帝大と早慶大について学科単位で分類した結果が表7である。東京帝大出身者の場合は、文学系学科では、国文学から英文学へ、さ

表7 文芸エリートの学歴別・専攻分野別分布 (%)

	文 学					哲 学			社会	自然	医学	合計(N)
	国文	英文	仏文	独文	他	哲学	美学	社会	科学	科学		
〈東京帝大〉												
第Ⅱ期	16.0	8.0	0.0	0.0	16.0	32.0	0.0	0.0	12.0	8.0	8.0	100( 25)
第Ⅲ期	13.9	22.2	2.8	5.6	0.0	16.7	0.0	2.8	19.4	2.8	13.9	100( 36)
第Ⅳ期	21.7	13.0	17.4	13.0	0.0	0.0	0.0	8.7	26.1	0.0	0.0	100( 23)
第Ⅴ期	8.7	17.4	21.7	4.3	17.4	0.0	17.4	0.0	8.7	4.3	0.0	100( 23)
全 体	15.0	15.9	9.3	5.6	7.5	13.1	3.7	2.8	16.8	3.7	6.5	100(107)
〈京都帝大〉												
全 体	0.0	14.3	14.3	9.5	14.3	38.1	0.0	0.0	4.8	4.8	0.0	100( 21)
〈早大系統〉												
第Ⅱ期	0.0	66.7	0.0	0.0	0.0	22.2	0.0	0.0	11.1	0.0	0.0	100( 9)
第Ⅲ期	0.0	73.1	0.0	0.0	11.5	3.8	0.0	0.0	11.5	0.0	0.0	100( 26)
第Ⅳ期	7.1	57.1	14.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.3	7.1	0.0	100( 14)
第Ⅴ期	28.6	14.3	14.3	0.0	14.3	0.0	0.0	0.0	28.6	0.0	0.0	100( 7)
全 体	5.4	60.7	5.4	0.0	7.1	3.6	0.0	0.0	16.1	1.8	0.0	100( 56)
〈慶大系統〉												
全 体	4.2	12.5	12.5	0.0	20.8	0.0	0.0	0.0	37.5	0.0	12.5	100( 24)

らには仏文学へと主流が変化している。独文学や他の文学<sup>(28)</sup>は主流にはならなかった。哲学系学科では、第Ⅱ期、第Ⅲ期は哲学科が主流で、次いで社会学科、次いで美学科へと主流が移行していく。他には社会科学を修めた者が比較的多く、自然科学、医学を修めた者は少なかった。東京帝大出身者の場合は一つの学科が長期にわたって文芸エリートの供給機能を独占することはなかったのである。それに対し、京都帝大出身者の場合は哲学科への集中が著しい。これは西田幾多郎の門下へ哲学を志す学生が集中したためであると思われる<sup>(29)</sup>。東京帝大の哲学科が文芸エリートを供給しなくなっていく傾向と対象的である。

早大系統出身者は英文科への集中が著しい。第Ⅱ期から第Ⅳ期まで過半の者が専攻し、全体でも60%を越えている。国文学や仏文学専攻の者も時代を下るにつれ増加するものの、全体としては多くはない。また、哲学専攻は僅少である。早大系統の看板学科である政治経済科は16%の者が専攻し、英文科に次ぐ。また、慶大系統出身者は

## 近代日本における文芸エリートの社会学的考察

表8 活動領域別にみた各学歴層の文芸エリート占有率 (%)

	小説家 劇作家	詩人	歌人	俳人	評論家	哲学・思想 宗教・政治
〈東京帝大〉						
第Ⅱ期	17.4	50.0	14.3	33.3	30.8	46.2
第Ⅲ期	33.3	9.1	27.3	50.0	30.0	46.2
第Ⅳ期	21.4	10.0	0.0	33.3	50.0	0.0
第Ⅴ期	22.4	11.1	0.0	0.0	58.3	100.0
全 体	24.5	14.7	16.7	28.6	41.5	39.4
〈京都帝大〉						
全 体	3.2	2.9	0.0	0.0	12.2	18.2
〈早大系統〉						
第Ⅱ期	8.7	0.0	7.1	0.0	46.2	15.4
第Ⅲ期	21.6	31.8	36.4	16.7	20.0	7.7
第Ⅳ期	21.4	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0
第Ⅴ期	5.2	16.7	0.0	16.7	0.0	0.0
全 体	14.4	17.6	16.7	9.5	19.5	9.1
〈慶大系統〉						
全 体	7.4	8.8	3.3	4.8	2.4	0.0
〈初等・中等教育〉						
第Ⅱ期	34.8	50.0	50.0	0.0	7.7	7.7
第Ⅲ期	19.6	36.4	27.3	16.7	30.0	7.7
第Ⅳ期	32.1	45.0	66.7	66.7	0.0	16.7
第Ⅴ期	24.1	16.7	50.0	50.0	0.0	0.0
全 体	26.6	35.3	43.3	38.1	9.8	9.1

占有率とは、当該学歴保持者が、その時期、その領域の文芸エリート数に占める比率のことである。全員が当該学歴保持者ならば100%、当該学歴保持者が皆無ならば0%である。「全体」の場合は第Ⅱ期から第Ⅴ期までの合計値を分母にして算出した。

文学専攻が50%に過ぎず、前期には慶大系統の看板学科である理財科、後期にはもう一方の看板学科である医科の出身者が多い。哲学専攻は皆無である。

これまで、エリート研究においては、高等教育機関で文学を専攻した者は「ネグリジブルである」<sup>(30)</sup>とされてきた。また高等教育研究でも、高等教育機関において文学を専攻した者はどのように社会に配置され、どのような役割を遂行するのかということは、私の知る限りではほとんど明らかにされることはなかった。本稿での結果を見る限り、文芸エリートとして活躍した人々に文学、哲学を専攻した者が多く、これらの学問を専攻した者がいかなる社会的機能を担うのか、その一端が示されたのではな

いかと思う。

### ⑧ 活動領域別、学歴別の占有率

次に、各学歴層がいかなる領域で活動していたのかを表8に示した。上述のように、文芸エリートには東京帝大、早大系統、慶大系統などの東京の高等教育出身者が主流を占め、初等、中等教育出身者が極めて少なかった。それだけに初等、中等教育出身者がいかなる領域で活躍したのかという点は興味深い。

まず、東京帝大出身者については、増加しているのは評論の領域で、減少しているのは短歌、俳句の領域である。小説家の占有率には極端な変動は見られない。京都帝大出身者は哲学者、思想家に多く、次いで評論家に多い。早大系統出身者は、第Ⅱ期には評論家に多く、第Ⅲ期には詩人、歌人に、第Ⅳ期には小説家に多い。通算では、詩人、歌人、評論家に多い。また、慶大系統出身者は小説家、詩人に多い。それに対して初等、中等教育出身者が活躍するのは詩、短歌、俳句の領域で、評論や哲学、思想の領域には少ない。また、高等教育出身者と初等、中等教育出身者のこの棲みわけは時代を下るにつれ、より明確になるようである。小説家、劇作家については特定の学歴層出身者に偏る傾向は見られない。

出身階層別にも同様の比率を算出した結果、学歴との間に見られたような明確な関連は見られなかった。このことは、活動領域は出身階層よりも学歴によって決定される面が大きいことを示唆すると思われる。

## 5. 結論

以上検討してきたように、文芸エリートには著しく、大都市圏出身者、専門、管理職階層出身者、高学歴者、特に東京の高等教育機関で文学、哲学を専攻した者が多かった。また、東京帝大出身者は文芸エリート内で最大の集団であり、一高、三高に代表される大都市圏のセレクトイヴな高校の出身者が多い。つまり、身分階級を母胎とする供給源が弛緩し、学歴を母胎とする供給源へと移行したのである。近代日本の文芸エリートはレッセ・フェールの過程から登場するのではなく、東京の高等教育出身者を中心として構成されるのである。その結果、東京の高等教育機関への進学が容易な地域、階層の出身であることが文芸エリートになる上で有利に働くと考えられる。また、文芸エリートの供給源は各界エリートの供給源とは異なり、著しく閉鎖的、硬直的でコーホート間にドラスティックな変化を観察できない。特に、明治期においては一般国民とはもちろん、各界エリートとも乖離した、高学歴者の多い集団であった。しかし、時代を下るにつれて、特に東京出身者の比率と高等教育学歴所持率に関

## 近代日本における文芸エリートの社会学的考察

して、各界エリートの供給源が同質化する。

以上の事実は近代日本の文芸を考える際に大きな意味を持つであろう。供給源が文芸エリートの仕事を全面的に規定するのではないにしても、彼らの創作・評論が都市の文化、近代的職業、高学歴者の価値観と親和的な価値観を広く伝え、近代化を側面から支持したことは十分に考えられるであろう。また、彼らの価値観は、供給源の同質化が進行するにつれ、各界エリートの価値観とも徐々に親和性を増していったとも考えられるであろう。

また、農漁民階層と労働者階層からは、少なくとも文芸界のトップ・エリートはほとんど輩出されなかった。もちろん、農民文芸の伝統は、古くは自然主義文芸や白樺派文芸、さらにはプロレタリア文化・芸術運動において見受けられるし、労働者の文芸もあった。しかし、プロレタリア文化・芸術運動での成果を除くと、農民階層出身者によって描かれた農民の文芸、労働者階層出身者によって描かれた労働者の文芸は多くはなかったと考えられるのである。また、プロレタリア文化・芸術運動も既成文芸界の供給源にインパクトを与えたものの、それは部分的、一時的なものに過ぎず、昭和初期には終息するのである。

さらに、帝大出身の文芸エリートは評論や哲学、思想など主として分析、構成能力を必要とする領域で活躍したのに対し、初等、中等教育出身の文芸エリートは詩壇、歌壇、俳壇など主として感性を必要とする領域で活躍したのである。つまり、学歴は文芸エリートになる機会に大きく影響するだけでなく、活動領域にも影響を及ぼすのである。しかし、そればかりではなく、このことは高学歴を所持しない人々が何を豊かに所有しているかを暗示しているとは考えられないであろうか。

## 〈注〉

- (1) Mills, C. W., *The Power Elite*. (Oxford University Press, 1956) (鶴飼信成・綿貫譲治訳『パワー・エリート』東京大学出版会, 1958年)を参照のこと。
- (2) カウンター・エリートの概念については、北川隆吉・貝沼洵『日本のエリート』大月書店, 1985年, 181～203頁を参照のこと。
- (3) Keller, S., *Beyond the Ruling Class*. (Random House, 1963) pp. 96～98, を参照のこと。
- (4) 佐々木克衛「近世の文学」、高木博・佐々木・神谷吉行編『新日本文学史要説・古典』双文社出版, 1975年, 137～173頁。同様の指摘は次の文献にも見られる。関良一『逍遙・鷗外—考証と試論—』有精堂, 1971年。

- (5) 佐々木, 前掲論文, 139～140頁。
- (6) 中道実「現代日本における指導層の社会的性格(一)」『ソシオロジ』第57号 (第18巻1号), 1973年, 79～103頁, 及び「同(二)」『ソシオロジ』第59号 (第18巻3号), 1974年, 57～89頁。
- (7) 麻生誠『エリート形成と教育』福村出版, 1978年。
- (8) 萬成博『ビジネス・エリート—日本における経営者の条件』中央公論社, 1965年。
- (9) 麻生は『人事興信録』を用いて1903年から1964年までの各領域のエリートの分析を行った。「芸術家」は1903年, 1915年, 1928年には0名, 1939年には2名, 1955年には17名, 1964年には4名である。中道も『人事興信録』を用いて分析を行った。麻生と異なる点は, 記載事項の分析にとどまらず, 質問紙調査を併用した点である。その結果17名が『人事興信録』より抽出され, 9名について質問紙が回収された。また, 萬成は明治, 大正, 1960年の3時点において, 学者と芸術家を合わせて100名ずつ抽出して分析した。ただし, 芸術家は3時点とも17名であり, しかも学歴の分析以外には学者と区別されていない。
- (10) 中道, 前掲論文(一), 86頁。
- (11) 中道, 前掲論文(二), 61頁。中道の分析結果を列挙すると, ①上層階層の出身者比率は(1)教授76.2%, (2)医師50.8%, (3)会計士・税理士・建築士50.0%, (4)法律家65.0%, (5)文学・芸術家28.6%, (6)宗教家50.0%, (7)政治家43.8%, (8)官公役職者47.1%, (9)トップ・マネージャー57.3%, ②世襲率は, (1)18.9%, (2)0%, (3)14.3%, (4)14.3%, (5)0%, (6)25.0%, (7)12.5%, (8)13.5%, (9)72.8%となる。ただし, (2)～(6)については「実数が少なく, 表れた数字の信ぴょう性は低い」と付記している。
- (12) この点については, 菊池城司「近代日本における中等教育機会」『教育社会学研究』第22集, 東洋館出版社, 1967年, 126～147頁を参照のこと。
- (13) この点については, 今田高俊「社会的不平等と機会構造の趨勢分析」, 富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会, 1979年, 88～132頁を参照のこと。
- (14) 「その他」のカテゴリーには, 学者・研究者20名 (第Ⅰ期2名, 第Ⅱ期7名, 第Ⅲ期7名, 第Ⅳ期4名), 芸術家6名 (第Ⅲ期2名, 第Ⅳ期3名, 第Ⅴ期1名), 登山家3名, 漫画家, 随筆家, ジャーナリスト各2名, 落語家, 外交官, 翻訳家, 医師, 教育者, 映画監督, 川柳作家各1名の計42名が含まれる。
- (15) 戦前期官僚制研究会編, 秦郁彦著『戦前日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会, 1981年, 11頁。

## 近代日本における文芸エリートの社会学的考察

- (16) 萬成, 前掲書, 82頁, 及び118頁。
- (17) 高根正昭『日本の政治エリート—近代化の数量分析』中央公論社, 1976年, 107頁。
- (18) 麻生, 前掲書, 193頁。
- (19) 萬成, 前掲書, 53頁, 84頁, 88頁, 及び112頁。
- (20) 秦, 前掲書, 14頁。
- (21) 特に, 官立では東京外語, 東京高商(東京商大), 東京高師出身者が多く, 私立では明治法律学校(明治大), 東京法学院(中央大), 国学院大出身者が多い。
- (22) 他の五帝大からは5名の文芸エリートが出ており, その内訳は九州帝大出身者3名, 東北帝大出身者2名である。北海道帝大, 大阪帝大, 名古屋帝大からは文芸エリートは出ていない。
- (23) 萬成, 前掲書, 55頁, 85頁, 及び115頁。
- (24) 麻生, 前掲書, 220頁。
- (25) ただし, ここでいう一高出身者には前身の東大予備門の出身者を含む。なお, 東京帝大出身者の内, 一高, 三高以外のナンバーズクール出身者の内訳については, 二高5名, 四高2名, 五高4名, 六高1名, 七高1名, 八高3名の計16名である。
- (26) 内訳は, 浦和高校2名, 東京高校1名, 大阪高校2名, 成城高校1名, 学習院高等科6名の計12名である。これら5校の他にも, 武蔵高校, 浪速高校, 姫路高校など東京, 関東, 大阪, 近畿に高校はあったが, サンプル中には出身者はいなかった。また, その他の旧制高校の出身者は9名で, その内訳は弘前高校, 山形高校, 静岡高校, 松山高校, 山口高校, 福岡高校, 台北高校の出身者が各1名, 佐賀高校の出身者が2名と分散している。
- (27) 京都帝大出身者の内, 一高, 三高以外の旧制高校出身者は7名で, その内訳は, 五高, 七高, 山形高校, 松本高校, 松江高校, 佐賀高校, 成城高校の出身者が各1名ずつである。なお, 九州帝大, 東北帝大出身の5名の文芸エリートの出身高校の内訳は, 松本高校1名, 福岡高校1名, 高等専門学校などの出身者3名となっている。
- (28) 他の文学とは支那文学, 漢学, 言語学, 博言学などを指す。
- (29) 例えば, 天野貞祐, 三木清, 戸坂潤などは一高から西田の教えを乞うために京都帝大に進学している。
- (30) 麻生誠「近代日本におけるエリート構成の変遷」『教育社会学研究』第15集, 東洋館出版社, 1960年, 158頁。